

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	内戦後スリランカにおけるムスリム国内避難民の共生に関する調査
氏名 Name	浅井登紀子
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	アジア・アフリカ地域研究研究科・グローバル地域研究専攻 一貫制博士課程5年
渡航国 Country	スリランカ
渡航日程 Travel schedule	2025年2月8日～2025年3月30日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本研究の目的は、スリランカ内戦中に強制移動を経験したムスリムの人々の事例から、国内避難民による新たな地での帰属の異なる他者との共生とホーム形成の実践について、スリランカのムスリムを取り巻く政治・社会的状況を踏まえて考察することである。

多数派民族シンハラ的支持を得たスリランカ政府軍と、タミル多数派地域である北部・東部州の分離独立を求める反政府タミル武装勢力との間の民族紛争であるスリランカ内戦（1983～2009）のさなか、タミル武装勢力によって故郷を追放された北部州のムスリム住民は、多くがシンハラ多数派地域への避難を余儀なくされた。内戦終結後も、第二の民族マイノリティとして政治的に周縁化されてきたムスリムは内戦後の帰還政策から周縁化されてきたため、多くが現在も避難先の地にとどまり続けている。申請者はこれまでの研究を通して、ムスリム国内避難民は避難先の土地での近所付き合いや婚姻、地域住民による活動や様々な集会の場での交流を通して、帰属の異なる人々と重層的な関係性を構築しながらローカルな社会関係に組み込まれていること、そうした交流の場は男女によって異なること、また、そうした社会関係は彼らの新たな地でのホーム形成において重要な意義をもつことを明らかにしてきた。今回の渡航ではこれまでの研究を踏まえて、生活場面や地域活動、ムスリム女性による説法集会での参与観察と、国内避難を経験したムスリム女性と他民族を含む地元住民への聞き取り調査から、彼女らと地元住民との共生の実践と、スリランカのムスリムを取り巻く現代の状況への人々の認識に関して調査を行った。今回の渡航では、博士論文執筆のためのこれまでのフィールド調査の追加調査としての位置づけであると同時に、ムスリムの帰属意識にとって重要であると考えられるラマダーン（断食）時期の実践についての調査も行った。

成果 Outcome

内戦中の国内避難を経て定着したムスリム住民が多く暮らす北西部州プッタラム県にてフィールド調査を行った。滞在中は、ムスリム国内避難民が集住するエリアと地元住民が暮らすエリアが隣接する地域の、北部州出身ではないムスリム家族宅にてホームステイをした。今回の調査では、主に①ホームステイ先とその近隣で開催されるムスリム女性のための説法集会・イスラームについての学習会での参与観察と、主催者・参加者への聞き取り調査②国内避難を経験したムスリム住民と近隣に暮らす地元住民への聞き取り調査③各種団体への聞き取り調査とプログラムでの参与観察④生活場面での参与観察を行った。データの詳細な分析は今後行うが、以下、上述の調査内容による各項目に関する成果を記述する。

① ムスリム国内避難民と地元住民との共生

聞き取り調査からは、現在ではプッタラムで生まれ育った世代が増加したことや、避難民と地元出身者との婚姻が一般化したことから、北部州出身者を「避難民」として特別視・差別する／されることはほとんどなくなったという声がよく聞かれた一方で、現在でも差別に直面する場面があるという声もあり、後述するように地元住民が避難民を他者化するような場面も見られた。日常生活では主にホームステイ先の世帯員と近隣住民との関わりについて観察を行った。また、北部州出身のムスリム女性が代表を務め、女性のエンパワメントのために幅広く活動を行っている NGO では、避難民と地元住民の調和のための取り組みについて話を伺うことができた。

② スリランカのムスリムを取り巻く現代の状況への人々の認識

内戦終結後、スリランカでは民族間の分極化とその文脈上でのムスリムのグローバルなウンマへの志向や敬虔運動、ムスリムの宗教・政治コミュニティ内部での分極化が指摘されている。聞き取り調査では、スリランカの民族間関係、シンハラが多数派を占める政治的状況、2019年のイースターテロ事件後のムスリムを取り巻く状況などについてどう思っているか、自身の生活にどのような影響があったか、また、イスラームをどのように学び、実践しているかということに関して話を伺った。宗教間の融和を推進する団体で活動する宗教指導者（ムスリム・ヒンドゥー）には、プッタラムにおける民族間関係や、民族・宗教間の融和のためにどのような活動が行われているかについて聞き取り調査を行った。また、同団体が仏教寺院にて開催した、各宗教から宗教指導者と参加者を招待したイフタール（断食明けの食事）プログラムにも参加した。また、全セイロン・ジャミアドゥル・ウラマーのプッタラムシティ支部でも聞き取り調査を行った。

③ ラマダーン（断食）月の実践

2025年は3月2日から3月30日にかけてラマダーン月にあたり、ラマダーン中の実践について参与観察と聞き取り調査を行った。ラマダーン期間中は各モスクや個人宅などで、イスラームへの改宗者・寡婦・困窮者を対象とした食料品の配布などのサダカ（喜捨）が行われていた。ラマダーン期間中のホームステイ先の家族と近隣住民との会話では、ラマダーン期間中のサダカを巡って、「避難民のエリアでサダカが多く行われる」、「『彼ら（避難民）』は『私たち（地元住民）』に対してサダカを分けてくれない」といった会話が頻繁に聞かれ、「避難民」／「地元住民」という二項対立的なカテゴリーが前景化する様子が見えられた。

ホームステイ先で行われていた説法集会では、参加者が毎週定額を出し合い集めたお金と、主催者であるホストマザーが知人から募った寄付により、42名の参加者に加え、他民族も含む近隣の困窮者数名への食料品のサダカが行われた。説法集会は通常ムスリムのみを対象に自宅で行っていたのに対して、サダカの食料品を贈呈する際には村役場の事務所で、事務所で働く職員（シンハラ）や地域のヒンドゥー寺院の司祭（タミル）も招待して行われた。このサダカが行われるまでの経緯についての観察と、主催者への聞き取りを行った。

今後の展望 Prospects for the future

フィールドで収集したデータについて、今後詳細な分析・考察を行う。そして、博士論文のためのこれまでのフィールド調査（2023年8月～2024年1月、2024年2月～3月、2024年6月～8月）で得たデータと合わせて、その成果を投稿論文・学会発表の形で公表することと並行して博士論文の執筆を行う。継続的な調査を通して、聞き取り調査の場面だけでなく、日常生活での会話やフィールドの人々の実践からも様々な気付きを得ることができた。同時に調査

者自身がアクターとしてフィールドでの社会関係に巻き込まれる中で、自身の関心の変化とそれともなう対象の見え方の変化を感じてきた。こうした気づきや自身のフィールドへの関与も踏まえながら民族誌を記述することを心掛けた。博士論文では人々の日常生活を出発点として、「IDPs 対ホスト」「シンハラ対ムスリム」といった二項対立的な捉えかたから離れ、多面的・重層的な社会関係と共生の実践を描くことを目指したい。